

FAX送信サービス

@Tovas
×
UT/400-iPDC
導入事例

USER COMPANY



IBM i (AS/400)からのダイレクトなFAX送信で、売上増加を支える業務の効率化をシステム面からサポート。ランニングコストを40%以上削減。

日本サニパック株式会社(以下日本サニパック)は、家庭用・業務用ゴミ袋の分野で国内シェア第一位を誇るメーカーだ。高い品質ときめ細かな顧客の要望への対応が支持され、1970年の創業以来、右肩上がりの成長を続けている。

多品種で低単価という取扱い商品の特性から、取引関連の明細数は非常に多い。売上の拡大に比例して納品書や出荷案内書等、帳票の量も増加しているが、同社では既存の情報資産とシステムを最大限に活用することで、業務の煩雑化を抑えている。

今回は、発注業務に欠かせないFAX送信のシステムにおいて、運用の柔軟性を高めるとともに、月々のランニングコストを40%以上削減することに成功したプロセスについて、お話を伺った。

USER PROFILE



日本サニパック株式会社

設立: 1970年

年商: 106億円(2016年度)

従業員数: 69名(2017年4月1日現在)

ポリエチレン製ゴミ袋、食品保存袋、水切り袋、紙製ゴミ袋など、家庭用・業務用のゴミ袋の国内シェアNo.1を占める。日本のゴミ袋メーカーでは唯一となる自社工場を保有し、高い品質管理ときめ細かな顧客要望への対応を強みとしている。伊藤忠商事の100%子会社。

[URL] <http://www.sanipak.co.jp/>



物流企画・情報システム本部
情報システム課
課長
宇野 康典 氏

BACKGROUND

導入の背景

人数はそのまま、でも売上は拡大
システム活用による業務効率化が課題に

日本サニパックでは、毎年テーマを設けてITの活用による業務改善に継続的に取り組んでいる。拡大する売上とそれに比例して増加する業務量を既存の人数で支えるには、各工程での業務を常に効率化し続けることが不可欠だからだ。

このとき見直しの対象となったのは、毎月約15,000枚の納品書、出荷案内書の配信に利用しているFAXサービスだった。10年ほど前に導入され、当時としては画期的なシステムだったが、年月の経過とともに送信量が増え、ランニングコストも増大。それに加えて、帳票レイアウトの変更は大小に関わらず都度ベンダーに依頼せねばならず、短くても2週間、長ければ1ヶ月以上かかる上、作業費も発生するなど、運用面でも課題を抱えていた。

PASSAGE

導入の経緯

基幹システムのAS/400を最大限活用
ハードもデータもまとめて使いやすく!

そのような折に、情報システム課の宇野氏がアイエステクノポート社とコクヨが主催したセミナーに参加。そこで、「UT/400-iPDC」と「@Tovas」の連携ソリューションを知り、すぐに興味を持ったという。

「UT/400-iPDC」は、表現力のあるグラフィカルな帳票を簡単に設計し、PDFに出力できる、アイエステクノポート社が開発・提供する帳票ツールだ。外部サーバ等を必要とせず、基幹システムであ

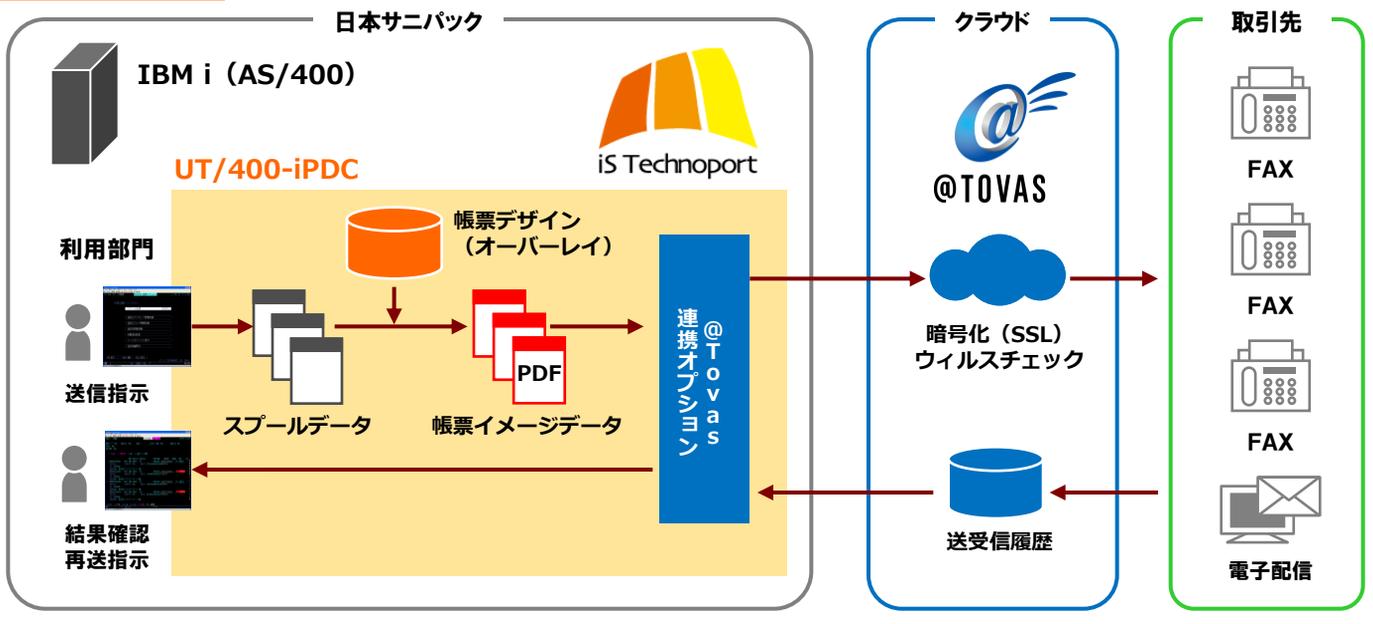
る「IBM i」上で稼動することが最大の特長で、印刷や他システム連携などのオプションも豊富だ。中でも「UT/400-iPDC」で生成したPDF帳票を、「IBM i」からダイレクトにFAXやファイルで送信することを可能にするのが、「@Tovas連携オプション」である。

すでに「UT/400-iPDC」を導入していた同社にとって、PDFを紙に印刷する感覚でFAXが送信できること、従来は外部に依頼していた帳票のレイアウト変更が自社内で行えるようになることは、大きな魅力だった。

また宇野氏は、「サーバを増やさなくてよいものは増やさない。データも分散しない。分散しないことによって、データを利用しやすくする」と自身の考えを語る。ハードウェアもデータもなるべく集約していくことが、システムと業務の煩雑化を防ぐことにつながるのだという。「IBM i」上で帳票の生成から配信までの機能が完結する今回のソリューションは、この基本的な考えにもマッチしたものであった。

選定にあたっては、システムの安定性、信頼性も重要だ。障害は情報システム部門にとって大きな負担となるだけではなく、業務が止まることで利用部門や取引先にも影響が及ぶ。日本サニパックが「IBM i」を使い続けるのも、その安定性に信頼を寄せているからだ。だが基幹システムが安定していても、周辺システムの信頼性が低ければ、その強みを最大限引き出すことはできない。「@Tovas」はクラウドサービスということで当初は不安の声もあったが、年間稼働率等で信頼性を確認し、利用に踏み切ったという。

システムイメージ



RESULT

導入の効果

システム開発は1日
ランニングコストを40%以上削減

日本サニパックではもともと「UT/400-iPDC」を利用していたこともあり、「@Tovas連携オプション」の導入は非常にスムーズだった。「すでに印刷プログラムがあったので、出力先をプリンターから@Tovasに変えるだけ。1日であつというまにできました」と情報システム課の小手川氏は当時を振り返る。

利用部門でも、業務システム(5250画面)から印刷する感覚でFAXを送信できる。「現場の方は、少しの変化にも敏感。違和感があると連続した業務の流れが止まってしまう」(宇野氏)ため、使い慣れた画面から操作を行えることが、業務の効率化につながっているという。送信エラーの確認や再送の指示も、利用部門側で行うことが可能だ。

帳票のレイアウト変更も、従来は外部のベンダーに依頼し最短でも2週間以上かかっていたのが、早ければその日のうちに対応できるようになった。これにより、「帳票に一定の期間だけ取引先向けの『お知らせ』を挿入したい」といった要望にも、現在は柔軟に応えられるという。

作業を自社内で完結させることで、外部への支払いも発生しなくなり、コスト面でもメリットがあった。送信にかかる月々のランニングコストも、導入前と比較し40%以上削減されている。

サービスの品質も安定しており、導入当初は履歴をこまめにチェックしていたが、特に問題がなかったため、現在はほとんど意識することはないという。

SUCCESS FACTORS

成功要因

ツールをうまく活用し手間とミスを減らす
将来的には他帳票への展開や電子化も

日本サニパックが少ない開発工数で大きな効果を生んだポイントはどこにあったのか。根底には「ツールをもっと活用しよう」という、同社の基本的な考え方がある。

ツールをうまく使えば、業務の手間が減る。手間を減らすことは、

結果的にミスをなくすことにもつながる。ツールの導入には確かにコストもかかるが、そのことで手間とミスが削減できれば、長い目で見たときにより大きなコストメリットが得られる、と宇野氏は語る。

今回のプロジェクトでは、基幹システムである「IBM i」を徹底的に活用しよう、というのもテーマのひとつだった。「IBM i」上で帳票生成から配信までが完結する「UT/400-iPDC」と「@Tovas」の連携ソリューションは、そのために最適なツールだったのである。

とはいえ、同社は「パッケージ利用」自体にこだわっているわけではない。ツールの活用は、システム全体の開発工数や運用工数の削減にもつながる。不要な工数が削減できれば、自社開発のリソースはパッケージ化された製品ではカバーしきれない顧客の要望への対応など、独自の価値を生む仕事に集中できる。そのために、すでにいいツールが世の中にあるなら、それは積極的に使っていこう、という考え方なのだ。

現在、「@Tovas」の利用は納品書と出荷確認書のFAX送信が主だが、今後は納品書や請求書にも取り組みを広げていきたいという。「UT/400-iPDC」と「@Tovas」は共に帳票や業務を問わない、いわば「帳票基盤」「配信基盤」として活用できるツールなので、新たなシステム投資や開発を行うことなく、他帳票の横展開や、電子配信への移行が可能だ。

すでに、要望のあった取引先に対しては電子による配信も行っているという。今回のプロジェクトですでに投資コストは回収できているため、今後は合意をとれた相手先から少しずつ進めていく予定だ。ツールの徹底活用と継続的な改善が、今日も日本サニパックの業務を支えている。



物流企画・情報システム本部
情報システム課
小手川 勝己 氏

※本カタログに記載した社名および商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。※商品仕様は、平成29年7月1日現在のものです。商品仕様は予告なく変更することもあります。あらかじめご了承ください。

コクヨ株式会社

東京品川オフィス
〒108-8710 東京都港区港南1丁目8番35号
ホームページURL
<http://www.attovas.com>

お問い合わせ、ご相談はフリーダイヤル(全国共通)

専用フリーダイヤル ☎ 0120-594-550

@Tovasヘルプデスク ✉ Info@attovas.com

